

秀賞

自分の心と向き合う挑戦

岩手県宮古市立宮古西中学校

3年 及川 華奈

私は頑固なところがある。心がいつも決まっていて、あまり人の意見に左右されないし、揺れることがない。きっと、私の心は固くて大きな石みたいな感じ。そんな私には一つ上の姉がいる。姉は素直な人だ。人の言葉をそのまま受け取り、心がよく揺れている。顔は似ていると言われることが多いけれど、性格は似ていないなあ、と思う。姉は人の意見に左右されやすく、自分の意見はないの？ って、私はちょっぴりイライラしていた。

そんな姉は中学1年生でテニスを始め、一生懸命に頑張っていた。そんな姉に刺激され、私も同じようにテニス部に入部した。一つ上で一歩先を走っていた姉は、たくさんの指導を心に吸収して、そのたびに泣いたり、迷ったり、たくさん負けて、反省をして、そうやって最後の中総体を迎えていた。これまでもらったアドバイスをすべて吸収して、最後に集大成といえるような結果を出し、最高の試合を見せてくれた。

姉が部活を引退し、私の最後の1年が始まった。中学1年も、2年も、一生懸命頑張ってきた。部活は1日も休まなかったし、自主練もたくさんやってきた。けれど、なんだかしっくりこなかった。一定のレベルで成長が止まっている、という感じがした。特に悩んだのがサーブだった。威力が弱いし、成功する確率も低い。テニスは2回サーブを失敗すると、失点するのだが、この失点もたくさん重ねるようになっていた。実は1年生の頃に、サーブの時のラケットの持ち方を、コーチから指摘されていた。

「その持ち方だと、最初は良くても威力が上がらないし、入りが悪くなってくるから、変えた方がいいよ。」私はその言葉を受け入れられなかった。

「今うまくいってるから変えたくない。これでいいじゃん。」

そんな日々を重ね、エントリーした大会で、私は散々な負け方をした。ミスも多くて、役割を果たせない。重苦しい気持ちで1日を終えた。帰り道、父に「何が悪かったと思う？」と聞かれた。無言の私に父は「素直に人の話を聞かなきゃいけないと思う。アドバイスをもらっても、自分の心に入れてないから、生かせない。」そう言った。

私は「聞いてるもん。やろうとしてるし。」

と言い返した。「聞きたいことだけを聞いてないか？ 自分の中で必要、必要じゃないって分けてるんじゃないか？ そう見える」と言われ、頭に浮かんどの

がサーブの時のラケットの持ち方だった。

「いつか引退する日がくる。その時に、今まで頑張ったことを全部出し切りたいと思わないのか？ 少し、自分を振り返ってみなさい。」と、父は言った。

「今うまくいってるから変えたくない。これでいいじゃん。」この頑固さがよくないのかも。初めて、私は自分の心の持ち方に疑問を持つと同時に、姉の引退の日を思い出した。

私を時々イライラさせる姉の心。人に左右されすぎてると感じていたけれど、テニスに向き合う姉の心は大地のようだった。何もない、乾いた土に、たくさんの人からのアドバイスや応援をぐんぐん吸収して、小さな芽を出して、最後に大きな花を咲かせたんだと思った。

その日から、私は考え方を少し変えることにした。「必要ない」を「まずはやってみよう」に。自分の心と向き合う挑戦を始めたのだ。

ラケットの持ち方は、もちろん最初はどうもいかなかった。何回も何回も繰り返して、おそらく千回を超えたあたり、しっくりくるサーブが数本打てるようになった。

「うまくいく時があるんだから、もっとうまくいく時が増えるはず。」私の心はそう決めた。試合ではうまくいかない時もあったけれど、前のままでいるより絶対に前に進んでいる！ そう思い続けた。

中学最後の試合は県中総体の団体戦。苦しみ続けたサーブはほぼミスなく決めることができた。悔いなく、楽しみながら戦い、1勝することができた。心がすっきりと晴れ渡るような、最後を迎えることができたと思う。

私の心は素直じゃなくて大きな石みたい。その心と向き合う挑戦は、とても苦しかった。けれど、その挑戦の先で多くのことに気づき、ほんの少し、変わることができた。

そんな私に姉は「自分をしっかり持ってる華奈はカッコいいよ。」そう言ってくれた。

大きな石を大地に置いて、周りに水をまいてみると、たくさんの種が芽吹く。私の心の大きな石の周りにはたくさんの花が咲く。そんな心で生きていけたらいいなと思う。